

親と子サンデー

道新デジタルの教育コーナー

道新先生

検索

とうきょうだいこうしゅう ひさい たくほくのうへいたい
東京大空襲で被災 拓北農兵隊に

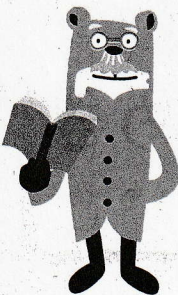
東京大空襲で焼きつくされた東京 1945年



米軍は34年（同9年）の函館大火など日本家屋の火災を研究し、特別なガソリンを使う焼夷弾を作って空襲の効果を上げました。

幼いとき一家で音更に移住 佐方さん

太平洋戦争中、後に「東京大空襲」と呼ばれる米軍の空襲が東京でありました。1945年（昭和20年）3月10日、住宅密集地に落とされた「焼夷弾」は木造の家々を焼きつくし、一晩で約10万人がせいのとなりました。空襲は全国の都市でもあり、多くの人が焼け出されたのです。政府は被災者を中心に、疎開と食糧増産のため北海道の開拓農業をする人を集めました。それが「拓北農兵隊」。つらい経験をして北海道にわたり、北の大地を耕してくれた歴史について、東京で被災した女性の思い出をもとに振り返ります。（編集委員 鈴木雅人）

佐方三千枝さん
(本人提供)

45年は東京で4〜5月にも大きな空襲があり、7月14、15日の北海道空襲では室蘭への艦砲射撃などで約2千人の死者が出ました。千葉県松戸市の佐方三千枝さん（82）は当時の東京都深川区木場



飯橋を造る佐方さんの父（後列右から2人目）ら音更町音幌の人々。橋は台風でよく流された。1954年ころ、音幌五十周年記念誌から

おとうと いのち せん そう にん げん
弟の命うばった戦争「人間はおろか」

に実家がありました。東京大空襲の時は4歳。夜に空襲警報が鳴り、母に起こされ、防空すきんをかぶって祖母の背に負ぶさりました。大きな音がひびき、近くの材木屋に焼夷弾が落ちたのかも」と母たちが話したそうです。空は真っ赤で、耳の辺りを火の粉がおそいました。

母たちは防空ごうのたて穴に防火用水を入れ、飛びこみました。底のどろ水に母は弟を、祖母は三千枝さんをそれぞれかばうようにひたつたのです。後から入ってくる人の重みにたえませんでした。人や物をなめるように火が通り過ぎ、悲痛なげき声が聞こえ、やがて静まります。穴の底に焼けた人が落ちてきました。

一夜明け、穴をはい上がりました。2歳の弟はどろ水を飲み、肺炎を起こしました。大やけどを負った母と祖母はリヤカーで弟を病院に運びましたが、翌日息を引き取りました。

3カ月後、新聞に「北海道集団帰農者募集」という広告がのりました。佐方さんは戦地から帰ってきた父も入れて一家4人で8月、上野駅を出発し、十勝管内音更町へ入ります。多くが開拓の苦勞の末、農業をやめて本州などへもどりましたが、一家は59年まで同町音幌で暮らし

ました。

北海道戦後開拓史などによると、拓北農兵隊は45年7〜11月、東京、神奈川、愛知、大阪などから25回にわたり道内へ入りました。約3400戸約1万7千人に上ります。住宅の用意、農地や農具、種の貸しあたえ、食べ物の配給などが約束されました。しかし多くが守られませんでした。その姿は、開高健の小説「ロビンソンの末裔」にくわしく書かれています。

佐方さんは59年春に帯広柏葉高を卒業し、東京へもどりました。就職や大学進学を経て、結婚、帯広出身の歌人中城ふみ子の研究をしながら、東京大空襲の歴史をほり起こした作家早乙女勝元さん（2022年死去）にすすめられて、大空襲に関係する追悼行事に出席してきたのです。

3月10日が近づき、「弟にももつと長い人生があつたはず。なぜ2歳で亡くなったのか」と語ります。そして、ウクライナの紛争でも子どものぎせいに心を痛めています。「命を争いで失うとは、人間は何ておろかなのだ。戦争はごめんだ」

10年ほど前に作った歌を教えてくださいました。



焼夷弾避けし壕より生きのびし最後のひとりとなりて老いゆく